

# 一九七四年、或る画像



マツイアキラ

蒸し暑い、いったん退いた汗がまた出てきた。

都下・立川市職員の中村真司が立川から乗った中央線東京行き冷房は効いていたが、国分寺で特急あずさの通過を待つ間、ドアが全開の車内には六月末の澱んだ湿っぽい熱気が容赦なく入り込んでくる。

午後六時を過ぎた車内は混んでいた。ドアに近い座席に腰掛け、機械的に前の座席に座っている男を見た。

瞬間、「あ」と、こころのなかで思わず声が出た。

Mが、そこにいた。

三分という長い待ち時間の間に次々と乗客が入ってきてMと中村の間を遮ったので、ひとの隙間からMの顔や背格好を見る。Mは見られていることは気づかない様子だが、眼を閉じたかと思うときおり薄眼を開いてしらっとした視線で車内を見渡す。中村は視線を注ぎ続けることはできず、電車が再び動き出した国分寺から三鷹の間、手元の夕刊紙に眼をやるしかなかった。

三鷹駅で乗客が大きく入れ替わったときにもう一度しっかりと見ると、Mは五十を過ぎた男と女の三人連れのようだ。髪には白いものが混じっているが眼がいまも過去と同じ粘りつく痛性の光を出し、大きな顎とひよろつとした体躯の薄い肩幅のアンバランスは三十年前と変わらない。連れの男はずんぐりした躰にアンパンのよくな丸い顔、女は色黒で胸も尻も肉が痩せ化粧っ気とか女っぽさがまるでない。三人とも薄く汚れていて、噂で聞いているようにMは新左翼の内ゲバ活動家を二〇〇五年のいまも続けている様子だ。

Mと社会変革の運動をしたのはともに二十代の一九七〇年代前半だった。神経質な修行僧といった印象の飛び出た眼とペリカンを連想する大きな顎のMの風貌に、長い時間の経過にもかかわらず大きな変化はない。反していまの中村は眼鏡を掛け体重も当時の五十三キロから二十五キロも増え、二十代の頃とは顔も躰つきも別人だ。Mは中村を見ても判別はできないはずだ。四十を過ぎたとき、二十六歳でK派

を除名された後も続けた社会運動から脱けた自分に、元左翼活動家の臭いはない。ただ、Mはたとえ中村の存在に気づいても声は掛けてこないだろう。中村からだ。すでに五十代、終わった時間にかかずらわっても意味のない年齢だ。Mを見ると、かつてのように足先をきっちりと前方に向け座っている。無表情の顔は眠っているように見えた。

## 2

「●資本家は労働者から労働力を買い、所有している生産手段を使って労働させ、市場に売り出す商品を生む。●労働者は労働力を売った代価の賃金で、衣食住をはじめとする生活資料を買い、労働力を再生産し労働力の肉体をまた売り出す。労働者の賃金は牛や馬などの家畜または車のガソリンと同じ生産のコストにすぎず、常に最低限に抑えられる。●八時間働いて一日の仕事を終えたとしたら、労働者は最初の四時間で自分の賃金分を生産し、資本家のためにあとの四時間労働する。自分のために働く時間を『必要労働時間』といい、資本家に捧げる部分を『剰余労働時間』と言う。賃金分として支払われる部分が少なければ少ないほど資本家の利益は増える、これを『搾取』と呼ぶ。それで、一九七三年のいま現在、ニッポンをはじめ先進国の労働者は搾取の取り分で資本家と大闘争している。資本主義体制のひっくり返しを求めてと言いたいが、そうとは言えない経済闘争、『賃金と権利の取り分を争う局地戦争』…… と言うことかもしれません」

昼間部一年生二十歳のMが、力無くいくらか虚ろに今晚の読書会の報告を述べた。「マルクス『賃労働と資本』を読んでの最大公約数がそんな単純な言い方でいいかはともかく、小学校高学年にも分かる言い方だ。但し、科学としての社会主義を世の中に広め、資本と労働者階級の戦争の武器にするため難題を大胆に単純化にするのも俺たち社会科学を学ぶ者の役割、その点では合格だ」

副部長、地区労でバイトする三年生二十三歳の佐川七朗が、威勢の良い声で十八人の参加者に司会として同意を求める。Mも佐川も社会党系政治党派○△同盟K派の同盟員。東京経済大夜間部社会科学研究会プレハブ棟部室での午後九時からの六

月四回目定例読書会に、中村は参加している。五月には、いまの時代と重なる歴史考察として林健太郎『ワイマール共和国』・村瀬興雄『ドイツ現代史』で四回、一次大戦後の政党・労働者運動と社会民主党政府・共産党地方政府の経験を学んでいる。

「でも、鳴沢さんのお給料なんて二万九千円でしょ、バイトとはいえ労働力の再生産がそのお金でできるの。最低の衣食住はともかく、労働力の質を高めるためのプラスされるべきの最低の教養費や最低の交際費、貯金なんて全然出来ないでしょ。仕送りもないし」

工業用ミシンの東京重機工業調布工場で事務員をしている二十一歳二年生部員の友田真希が、最低最低と連呼しながら問う。Mは内輪の読書会からか脱力している。形のいい胸を持つ友田の横で、椅子から転げ落ちそうなまま耳だけを傾けている様子だ。

「できてますよ」共同炊事場と共同便所の下宿家賃が光熱費込みで九千円、食費は一日三百円で計九千円、週一回の学食のカッドンうどんセットが二百円で最高のディナーかな。衣類はパンツ以外は実家から持ってきたのとあとは自治労の中村君からのお下がりで十分。授業料が三千円、活動のための交通費が四千円、本代は古本の文庫で十円が十冊、教科書は全部もらい物、交際費だって二千円、月に二千円は貯金。まあ、バイトバイト。二十五過ぎてこんな賃金のままなら、俺、大蔵省や三菱商事に放火するよ！」

吉祥寺の証券会社で刻一刻と変わる株価をチョークで板書するバイトをしている、北海道室蘭出身の二十一歳三年生鳴沢賢一は明るく答え、友田に切り返す。

「で、最低でない友田さんはボーナス含めいくらもらってる、俺にカンパしてくれよ」

「私は高卒勤続三年目だから給料は手取り五万六千円、ボーナスは去年六ヵ月、必要5対剰余3かな。賃金的には戦わなくなる可能性がある帝国主義本国大手企業の労働者ね。でも、鳴沢君にカンパはできないわ。実家に三万円入れているし、ボーナスは実家の建替えのために積み立てているの。夏にかき氷を冬には湯豆腐でも奢るから、それで勘弁してね」

「友田女史、ぜひ我々の戦線に留まってください。で、国鉄は幾らくらいとれるんだい」

佐川が訊く。

「民間大手世界企業の友田さんのあとで恥ずかしいけど、同じ大手でも高卒二年目  
駅勤務の私の手取りは三万九千円、ボーナスは年三カ月分です。ちなみに、私の  
五十二歳上司とその息子の高卒二年目市職員の今夏のボーナス金額は、同額だった  
そうです。国鉄の給料はそんなもんです。剰余労働のとられる分は、国会議員に赤  
字でも田舎に新線をどんどんつくられてしまうから国鉄そのものが大貧乏所帯、  
よくわかりません」

二十歳、一年生で新入部員の南武線登戸駅改札係の山本正道がもそもそと答えた。  
社研は社会科学理論の勉強の場として入会し、立看板、ビラ撒き、学外デモという  
行動面には参加していない。

「なんと、俺は必要3対剰余5だ。先進国では、『賃労働と資本』でいう原理論的  
資本主義は労働運動の実績もあって改善されて、金融、鉄鋼、電力、自動車、化学  
と、大企業の労働者連中はおこぼれも多いだろ。いまだき搾取の理屈に耳を傾ける  
なんて、連中のなかにいるのかよ？ 相当な貯金もできてるし株を買ったり那須や  
箱根の奥の別荘地を投資で買う奴までもいる。電機なんかは休暇だって七十年から  
土日休みだ。俺たち中小企業や旧植民地の第三世界からの収奪で成立している、全  
労働者のたった数パーセントの世界だろうけどねえ…… 戦う総評だって、資本と  
の経営協調路線を後押しする鉄鋼・自動車・電機などのIMF—JC連中をいまは  
無視できない。でも鳴沢のような日雇いは論外として、総評の屋台骨の国鉄も貧乏  
だねえ、零細企業で組合もない俺の給料と変わらない」

従業員二十名のマキタ製作所勤め、読書会参加者一年生村西誠の発言だ。 齢は  
二十五才。

「村西さん、人生の愉しみはなんだい？」

困った顔を隠さずに、佐川が訊く。

「巨人と競馬と安酒だよ。女とデートともいきたいが、そんな金と時間は俺にはな  
いな」

デートの金も暇な時間もないなら、読書会は無駄以外の何ものでもないはずだ。  
それでも、村西のなかにある充足されていない部分、その憤怒を何かで沸騰させよ  
うとしてこの場にいるのだ。いまという時代はそういつた怒りと行動への希求が渦  
巻いて、ある。

「ニッポン国民・労働者の圧倒的多数は、経済主義と議会制民主主義の妄想で生きている。連中の妄想限界は革新県政・市政までだ。プロレタリア独裁を前提とした革命なんてできるわけではない。階級戦争の武器とかいうが、闘うことはそんなに面白くない。左翼流のやり方で戦っても消耗するだけで果実がとれないんじゃないか、しょうがねえ。俺はたとえ五回に一回でもパチンコで木箱とったり長鳴がヒット一本打つと、身体中の血が逆流してアドレナリンがググツと上がる。自分に嬉しいことがあれば俺はかまわねえ。消耗する戦いじゃなくて資本の残り滓のおこぼれを待つポチになって待つのも、俺が選べる人生よ」

村西が我流の本音を続ける。

「マルクスの社会科学には、絶対的窮乏化と相対的窮乏化という大きな概念がある。労働苦や戦争で飢えて死に至るのが前者。飢えてなくてもこの世の発展や仕組みから除け者にされ、酒やスポーツ観戦、パチンコ等の生活享楽やギャンブルで憂さを晴らす、肉体は生きていてもこころは死んでいる状態、こころの飢え・疎外が後者。申し訳ないけど、村西さんはそんな状態の労働者なのかもしれない。でも、戦ってその成果を眼の前にするぞくぞくした感じを得ることができれば、ギャンブル等で生じるアドレナリンから解放されごまかしの享楽でない生きる実感を得られる。『組合員が組合活動の見物人にならない。労働者が企業意識と利己心に支配されない』が合言葉の仙台・全金本山の職場闘争では、地元工業高校を出て七、八年の者が、旧来の労組幹部を簡単に乗り越えて大闘争の主役になっている。彼等は、元は生産性向上委員会メンバー、元は提案制度の賞金稼ぎ、従来は資本側からも評価され自分の仕事に誇りと自信を持ってきた労働者だった。でも、切実な要求を職場討議によって掘り起こし、眼の前にいる対職制交渉で具体的に解決させた。自らの現場で自らの手で問題解決ができると知ったら、労働者はその瞬間に変貌できる。ひとは誰でも、眼前の事実の前では自らが主役だと、望んでいるのだから」

昼間の疲れで壁にもたれかかり眠っていると思われたK派同盟員で四年生津田満二十三歳が、立ち上がって発言した。『賃労働と資本』の読書会にふさわしいかとはともかく、熱のある言葉に聞こえる。

「そうね。一度きりの人生時間、私も時代とかかわりたいわ。OL、会社員、エンジニアだと言われても、本音は賃金奴隷ですものね。『賃労働と資本』の読書に戻れば、当時の資本主義的な社会状況についてコンパクトに分析した書であることは

分ったわ。高度に経済が成長した今日の日本でも、産業革命期の近代ヨーロッパにおける搾取体系と変わらないなんて私にはびっくり再発見。骨太い論理と知の蓄積でできた本を読めてよかったわ」

国立図書館短大を出て三年編入の読書会参加者瀬戸恵子、国会図書館勤めで齢は二十二。

「ま、本を読んで知識と論理を得るはずが、戦おう戦おう！　じゃ本来の読書会の趣旨から外れるかもしれないけど、それでも社会科学を労働者階級の武器へ！　がこの部の目標だから勘弁してくれよ。七月はレーニン『なにをなすべきか』の第一章を二回で……」

佐川が簡単な補足をして、読書会は午後十一時に終わった。読書会、部会が週に各一回、ほかに学内と地域を含めての連続講座の準備をしたり、週一回の昼夜計二〇〇枚の学内ビラや学外デモへの参加で、一週が八日も欲しい日々だ。それでも、部員のほとんどは勤めを続け授業にも出ている。佐川や鳴沢それに昼間部のMら四人がバイト暮らしでの活動のため、一日部屋にいてもあれば泊まり込みをすることもある。

東京都下にあるこの大学は世間相場で三流大だが、学生運動が全国的に盛んな拠点大学だ。昼夜間部併せて学生数七千名の経済単科大にもかかわらず、戦前からの党の日本共産党系全学連全国委員長をはじめ各党派の中核大学として十数派が勢揃いしていた。大学紛争収拾が困難な場合は文部大臣が廃校措置をとれるという治安立法の六九年大学立法粉碎反対闘争では、夜間部だけで在籍者の半数一〇〇〇名の学生が国分寺の街へデモ行進で出ている。日米安保、学園闘争の終結、連合赤軍事件、新左翼各党派間の内ゲバの激化と学生運動に決定的な衰退が始まった七三年六月のこの時期でも、七五年十一月の全国交通機関が麻痺した八日間の国鉄スト権奪還スト等労働運動への戦後史的な大高揚へ向け、また『戦後民主主義』への想いも残り、いまだ一般学生も含んだ校内での活動も盛んだ。

東京都下・立川市職員で夜間部社研部長の三年生中村真司二十二歳は、○△同盟K派のキャップ。二年生からこの大学で社会党系の社会科学研究会をつくり、K派の労農派マルクス主義を公然と名乗っている。いまはMを含め同盟員八名に社研メンバー内の同調者五名ほどで正門に八畳大の立看板を出し、夜間部での学生運動の特色として労働者運動をテーマの講演会や連続講座を催している。他に夜間部で○

○派と名乗っているのは、学生自治会の共産党系と歴史研究会の○△同盟K A派だけだ。

### 3

七十三年一月、中村は国立駅北口の喫茶店『白十字』で○△同盟員と待ち合わせた。兄がK派東大細胞にいて、弟の浪人生Mが東経大細胞に属したいという申し出だった。

中村は喫茶店ではいつも店の一番奥のコーナーの従業員用出入り口わきの席を選ぶ、K A派に襲われたときに逃げ出せる可能性を残すためだ。事実、K派・K A派互いの何人かが喫茶店や駅前から拉致され、山奥で土に埋められ自己批判要求やりんちを受けている。こういったことは十数派が勢揃いした三多摩地区では他党派間でも日常茶飯事だ。

店に入るとすでに奥のコーナーに座っている若い男がいた、Mだとすぐに分かった。話されていたとおりの、飛び出した大きな眼とペリカンを連想する大顎の外見だったからだ。十九歳と聞いていたが、ひよろつとした体躯の薄い肩幅と粘りつく癩性の光を出した眼は、神経質な中年の修行僧のような印象を受けた。足先をきっちりと前方に向け座っている。

Mはレモンティを、中村はナポリタンスパゲッティを注文した。

「Mです」

「中村です。お兄さんから聞いてるけど、夜間部細胞のうちに属して、うちの昼間部に入るということでもいいのかな」

「そのつもりです、合格はできます」

Mの顔は無表情だが、眼の奥には力がある。その眼から癩性の光で見つめられる。

「都内の大学もある、何でここに来るのかな」

「私は兄と同じ立川高校に一学期だけいて、それから小金井工高の機械科に転学しました。親は、せめて明治や法政の工学部へ入れと言っています。けれど、私はこの富塚文太郎の『現代の資本主義観』を読んで、世界全体を輪切りにしその中の

断片一つ々を明らかにしてくれるシャープな現状分析論に感銘を受けました。入学したらすぐ世界資本主義ゼミにもぐりこみ四、五年はいるつもりです。党派と大衆運動の組織論では、ソビエト共産党仕込みでプロレタリア独裁論堅持のわが派がシャープと思いますが」

特徴はあっても表情のない顔が、一瞬、高揚した。

「はあ、だったら少し分かるかな。おたく、K派らしくもあるし、らしくもないな」  
ジャブを出してみる。

「私は正真正銘のK派です。中村さんはK派として誤ったことをしています。昨秋の文化祭講演会、労組役員だけど山猫スト自主管理論の全水道東京と反合理化長期抵抗路線の国労八王子支部をぶつけましたね。大学でやることですか、KA派とK派の間接対決じゃあないですか。そんなことはわが派では許されません」  
齢も若く経験の浅いMが運動のことを熱心に観察していることに少し驚いた。

「どちらも官公労の中核労組だから大丈夫だよ。いまの段階では、どのやり方が国家や資本との決定的な争いの力になるかを、反面教師を含めて相対的に浮き上がらせる方法もあると思うな。K派の教義を拝んでるだけじゃ現場で使える活動家は集まらない。俺は労働者運動も反戦闘争も全国的に盛んな都下・三多摩地区に一つしかないこの夜間大学で、意識的な青年労働者を俺が信じるK派にリクルートしたいだけだよ。わが派の『階級対立の下では、多数決の民主的合議などはあり得ない。命がけの集団行動の核心は、プロレタリア独裁という名の前衛党による意思決定しかない』は当然認めている。但し、リクルートのやり方はいろいろあると思ってるんだな」

中村は、ひととおり学内の運動状況、勢力範囲を説明した。中村は自分が信じるリクルートのやり方を、MはそのリクルートへのK派としての参加と新しい認識の武器を得る。だからお互いにこの大学に用がある、それでいいという話に落ち着いた。

「中村さん、根っここのところの質問ですが、ここでの学生運動はやらないんですか？話を聞いていると、社研のやり方は自由奔放に見えますが活動の中心は徹底したK派の学習会運動です。もっと、夜間大学の特性である大教室問題とか非常勤講師中心授業の質の改善とかあるのではないですか」

「夜間大学は、この先にある小金井自動車免許場と同じ免許の交付所だ。決して実

技を教える教習所じゃない。実質年8カ月1日2コマ3時間のカリキュラムに登録すれば4年でまがりなりに学卒の資格がもらえる。その授業料も昼間部に比べ凄く安い、先ず学費闘争には全くならない。大企業はきついかもされないが、もともと商業や工業という職業高校でもあたまの良かった連中が来るから、市役所・消防署等の下級公務員や中小企業なら、大卒として受験しけっこうな率で受かってしまう。教科書とは違う経営書の読み方には接するから、高卒後の勤め先のままでも多少の理屈という武器が使えひとによっては部・課長になるコースに乗る者もいる。だから、大教室も講師の質も無関心、九月と一月の試験の単位をもらえさえすればよい。これが一般的な夜間生の気持ちだ」

「夜間生は貧しい環境から生まれた選別教育の一結果という立場にもかかわらず、資本主義社会の本質にも、良質の講義を受けるといふ学生としての権利にも無関心。だから、社研のような運動団体の存在は、学生総数に対して相対的に極めて少数ということですか」

「そんなところかな。三琉大でも昼間部も旧大倉高商の看板で就職率は意外に良い、一般学生の無関心は夜間部の理屈と大差ないかな。ビラは昼も夜も一〇〇〇枚は撒けるけど」

「中村さんは、どうしてK派へ」  
「ここで、あらためてMに訊かれた。

「一年目の秋に、K派の月刊機関紙『社会主義』の編集部へ電話したんだ。入りたてからオルグを寄こしてくれて。で、立川市役所とこの夜学に通いながら、七〇年の秋からとりあえず一橋大細胞に属すことから始めたんだ。でも正直、高校から接している共産党・民青、中核、△△派、KA派、K派とどこも同じ印象かな。どこの党派メンバーも何かにとり憑かれている気がするし、官僚主義だし、理論だ学習だといっても宗派のお経を読ませられるばかり。話すことの多くはいかにメンバー拡大できるかと他党派批判で、現状の階級闘争本流の論議はするにはするが意外にとっても少ない。正直、本題じゃない」

「社研の文化祭講演会、民青・KA派・△△派・ブンドも来てたのに、K派のお経を唱えないで部員の質疑はけっこう言いたい放題でした。いいんですか基盤の社研までそんなで」

「あだ花かもしれないけれど、とり憑かれとも官僚主義とも学習屋ともオルグ業と

も違う場のつもりだ。いま東経大細胞・社研は上げ潮だから叩かれないけど、独立愚連隊なんてK派や学内で言われるときもあるな」

「中村さんはK派らしくないひとです。本山のためだったら命を投げ出しても構わない、宗旨のために死んだら極楽へ行けるといふ信徒なみでないと、K派には二年と居られません。私も今のままなら、中村さんも社研もやはり許せません」

言葉に遊びを入れてみたが、会話にならない。Mは瞬間の会話は成立させても、すぐまた生真面目に本題に戻る。それでも、「今のままなら、許せません」と痛いところをつかれ中村は動揺し、コップの水を飲んだ。

「プロレタリア独裁、最終的に個の独裁指導部が前提の以上、うちがガチガチの左翼宗派なことには変わりはない。まあ、どんな手段や認識を使っても、当面俺は一生懸命にここで仕事をする。意味不明な言葉かな……」

「意味はわかります。でも正直、私は労働者階級の武器となる理論やその下でひとが集団で発展し変容する様を知りたいんです。ニッポンの革命運動・労働者運動の核的な基軸になる集団、いま、社会党・総評の場を獲得しつつあるK派で働くのは方法の一つです」

私たちは、結局、互いの認識の隔たりを認めつつも一時間ほど話を続けた。

駅まで歩く途中、Mは厚手のジャケットの内ポケットから金色の奇妙な棒を取出した。

「中村さん、これは私が工高二年の切削と研磨の実習で完成させた完璧な文鎮です。これには人間社会にある矛盾はありません。材質は銅・亜鉛合金の黄銅で出来た真鍮、一角が一五〇〇マイクロメートル、凹凸度が九九・九九%の完全加工面の真鍮四角棒、摘みを三〇〇マイクロメートル球形の中ぐりでネジ埋めしています」

それは、本体の中央に突起の摘みがある一・五センチ角、長さが三十センチ程の細い角棒で小判色の金の光を放っていた。

「はあ、素晴らしい科学的完成品だな。江戸時代の捕り手の十手にも見えるな」

Mは会話の間、自分から何度も視線を合わせてくるが、こちらが反応すると逆に暗転し虚空を見る眼になる。十九歳の浪人生の口から出る言葉は出色だったが、ひたすら自分の存在を消す対人恐怖症の人間という、活動家としては負と正両面の印象を中村は持った。負は、人間嫌いではその相手に合わせたオルグができない、正は、逆に相手かまわず党派の言葉だけを信じ伝える人間機械になれる。

Mは七十三年四月に経済学科一部（昼間部）へ入学した。

## 4

読書会の後、メンバーと西側正門を一度出てから中村はまた学内に戻った。裏庭の森を抜け、南側の塀をくぐる裏口から帰ったMの下宿に向かうためだ。

都心から三十分程離れたこの大学の構内は広く、新設された図書館棟と五〇〇人収容の大教室の南側には二〇〇〇坪ほどの裏庭の暗い森がある。おおかたは雑木林で覆われた斜面地で崖下二〇メートルには湧水の大きな池もあり、周囲からは遮断された空間となっている。

武蔵野台地特有の赤土が剥き出しになった崖の小道を下りていくと、雑木林の樹々の間で赤い色の光がさした。赤い色はぱっと燃え上がる赤とぼうつと灯る赤で、一瞬、光がこぼれまた暗がりに戻る。しばらくたって、赤い色は火の色でその場所に人間が座り込んでいることが分かった。

最初は、誰かが煙草に火を点けたのだと思ったが、そのうち、そうでないことに気づいた。二つの赤い光は何度もついては消えついては消え、一定の間隔をあけて続いた。ライターの火で何かを何度も炙っているようだ。ライターの石が擦れる音、次いでぱあっと暗い森のなかでひろがる赤い色の光、真赤に炙られた何かが薄ぼんやりとした赤になり終いにふっと消える火の光……。

とうとう我慢がしきれなくなって音を立てないように慎重に近づき、繁みの間からのぞいた。ちょうどそのとき、ライターの炎がMの大きな顎を照らし出した。Mは、腐葉土で満たされた柔らかな窪地に座り込み、右手にライター左手に一月に見たあの真鍮の文鎮を持ち、文鎮の先端部をライターの炎で炙っていた。今晚読んだ文庫の『賃労働と資本』の開かれたページが、その前にある。飛び出た眼が更に大きく見開かれ、ライターの一二〇〇度の炎が近づき文鎮の先端が真っ赤になる。それを、付箋の付けられた文庫のページに刻印する行為を、憑かれたように繰り返している。石が擦られる音、赤い炎の光、炙られた文鎮の真っ赤と、Mはページごとに同じことを何度も何度も……。

なぜ？ 中村はMに声をかけられないまま、その十分ほどの間、繁みに身を伏せ続けるしかなかった。

事件は、七十三年の秋に起こった。このとき、中村たちは○△同盟三多摩支部名称の政治スローガンポスターを学内に百枚張り出した。すると、同じ○△同盟を名乗るKA派の三多摩分室が、分室本拠がある国分寺での挑発だ！ 絶対許せない行為！ と怒り、歴研のTとZたちが自己批判を求め中村を拉致しリンチじみた行為に出たのだ。夜中の十二時過ぎに歴研の部室に連れ込まれた中村は、両頬を殴られ背中を蹴られただけで、情けなくも腰が抜けた。一晩たって顔が倍に膨らんだ中村に突きつけられたのは、個人でなく学内党派としての自己批判だった。とうてい受け入れられない。結果このあと、K派三百人対KA派百五十人と党派動員をかけた日の人気のない構内で鉄パイプや大量の石礫で睨み合い、以後は学内では互いに○△同盟の党派名を名乗らないことで手打ちとなった。

しかし、冬になっても事件が続いた。これもK派が発端で、党派闘争の重点攻撃ということで当時の○△同盟KA派全学連全国委員長を出していた拠点校東洋大の期末試験に、KA派とその同調者だけを一切学内に入れない封鎖行動を二年続けて全都のK派学生動員で行ったのだ。実に卑怯なやり方だがこれは有効な方法で、結果として拠点校東洋大KA派に壊滅的な打撃を与え、首都圏全体での力関係も変えた。中村は、直接的な暴力には腰を抜かすような情けない人間だが、こういった力をいかに有効に使い切るかといったやり方には深く共感する。まさに、K派潮流のソビエト共産党機関留学仕込みの強靱な組織活動だと確信をし、信頼を深めた。社会党・総評ブロックをのっとり、ニッポンの社会変革・労働者運動の文字通り政治的リーダーになる日は五年以内だとも確信した。

## 5

七十四年の六月夜の十一時過ぎ、中村は大学裏庭の森の中に潜んでいた。月は明るい。

森を抜ける小道の入り口で懐中電灯の光が一瞬走った。歴研の会合を終えたZが森の中を抜けるぞという、Mによる合図だ。今年の春から△△派との内ゲバもかかえるZは、最近では正門からでなく大学裏庭の森の中を抜けて、用心深く日によって場所を変えた塀を乗り越え学外へ出る。KA派キャップのTと武闘派Zは異なる活動家だ。Tは狡猾で抜け目ないが、その分政治運動を自分の損得でも考えるタイプだ。半月前、東洋大の件から図書館前で再び中村を拉致しようとしたので、逆に、数百人の学生と大学職員の前だったがK派数名で石や手近にあった椅子で殴りつけた。運び込まれた医務室からもTだけを再度引きずり出し制裁を加えると、学内からその姿を見なくなった。

——TとくらべてZは駄目だ、甘くない。顎が張った顔は青白いが眉が濃くかたくなな表情で、運動を自分の損得で考えない。感情を消した能面の顔から党派活動家らしい一種の狂信的な威圧感を発し、党派という集団を疑似国家と信じ、その国家のためなら命を投げ出しても構わないと思っている。自分を機械のように酷使することをいとわない——。

中村は、Tへの制裁後、その機械に脅されていた。革命運動の十年先を信じ、反対派は潰しきるというZの政治的な『正義』のために、執拗に追いかけていた。下宿にも実家にも市役所にも脅しが重なり、この学内から退却することを迫られていた。

属する集団のために虚勢を張れても、根が小心者には、もう限界だ。

ある決断をした。

がさがさっと音がして、眼の前の小道からはずれた崖の下りをZが抜けようとする。躊躇なく、数本用意した長さ一メートルの木杭をその足元へほうった。Zは声を発しないまま、傾斜のある崖から木の根元へ前のめりに転んだ。ただ、倒れ込むとすぐ胸元から刃渡り二〇センチほどの小刀を出し、全身から殺気を放った。内ゲバが怖いという神経を捨てきっているようだ。中村は、決断をしたことへの恐怖で、身体の芯がぞくぞくっとした。

「なんだ、お前か。なんの用だ、降参か」

自分に罠を仕掛けたのが、襲った者の膝に打撃を集中し下半身を永久に不随にするという△△派ではなく、拉致られて腰を抜かすような中村、それも一人だったので殺気をゆるませた。無表情な両頬に、薄ら笑いが浮かんだ。

「やめにしないか。今度は支部も分室も口をはさまない。このままでは、お互い消耗戦だ」

声を落とし気持ちを冷静にさせて、なんとか言った。身体は震え続けている。

「降参の作法がこれか。お前はK派じゃない、まるで暴力至上主義で陰謀家のブランクキストだ。お前一人、退却しろよ」

無表情のままのぼそつとした声だが、Zの眼光に殺気が戻った。

「やめられるわけない。言っているのは、手打ちだ」

——なめきられて、不思議に身体の芯が落ち着く。自分は、絶対に退却しない。自分は、相手を退却させ、この場に残る——。

「駄目だ、なに、めでたいこと言ってる。お前ら全部、潰してきってやるよ」

Zは、いきなり身体を覆い被せ中村の左腕を押さえ込み、左手小指を一気に折り曲げた。小指一本が造作もなくぼきつと折れた。全身に熱した錐の痛みが走り眼のなかに星が飛ぶ。

予想のとおりだ、どちらかが強制的に退却するしかない。用意していた硬い石で顔を襲った。顔は急所だらけだから、どこかに当たれば逆襲となる。左の利き足を軸に右足を全力で振り抜き、股間に打ち込む。雑木林に隠した細い鉄パイプで、顔、胴体、手足へと間断なく攻撃を続ける。

けれど、そのすべての攻撃をかわされる。かたちのいいかわし方ではないが、転がり、のけぞり、這いずり、跳ぶ。付け焼き刃の中村と他大学への暴力行為で都内を渡り歩いているZとでは、場数の積み重ねが数段違う。避けながらも徐々に間合いを詰め、逆に優位な攻撃位置に立ってくる。結局、腹這いにされ今度は右の腕をきめられ、そのままへし折られそうになった。こっちが、退却するのか……。

ミシッと骨にひびが入るような感覚を受けた瞬間、Zの顔を細い金色の棒が襲った。合図をしたあと事情を知らずに様子をうかがっていたMが、あの十手のような文鎮を振り下ろしたのだ。傷んだ右手と小指の折れた左手の両方を使い何本目の木杭を引き抜いた。それから、再び小刀を取り出したZの首に全身の力で木杭の先端を振り下ろした。

ぶーうん！と木杭が振り落とされる音、ぶちっ！と太いゴムひもが断ち切れるような音が聞こえ、木杭は首の後ろ運動神経が束になっている頸椎を直撃した。手元に重い手応えを感じると、Zはそのまま力を失い足元からぐんと崩れ落ち、

口から泡を吹き全身を痙攣させた。顔からはみるみる血の気が失せ、表情が青白く固まっっていく。

五分位たつて息がとぎれとぎれになった。このまま、Zは死ぬと思った。

——互いの死の可能性を予想して臨んだことなので、しかたがない。ひととひとが動物になって激しく争えば結果として死もある。西部劇映画の殴り合いではない、自明なことだ。このことは、互いが信じる政治的な『正義』を争った上での、愚かだが聖なる事故だ——。

と想ったが、躰が硬直して動かない。自分の領分を超えたことをその瞬間に脳と躰は実行できたが、結果を得たあとの躰はこれ以上手足を動かすことへの拒絶反応を起こした。

Mが、池のそばの湧水をたまたま持っていたヘルメットに入れ飲ませてくれる。メットに満たされた髪の毛が混じった水を一気に飲み干したが足りない、続けてもう一杯飲むと、自力で何とか立ち上がれ腕も動くようになった。

「申し訳ない、こんなことになって。けど、おたくはもうこれ以上俺に付き合うことはない。いますぐ、ここから離れてくれ」

なんとか、言った。

「さっき、Zに水を飲ませました。太腿のリンパマッサージを続けたら血流が戻り、懐中電灯の光でよく見てください、顔に赤みが戻りつつある。手足が動くのと正常に喋れるかどうか、この場で待ちましょう。もし屍体になるなら、完全な処理をしましょう。屍体が公になったら△△派がやったことになるでしょう。警察は内ゲバ大歓迎だから犯人探しはしませんが、党派間では事件になります」

冷静にMが言葉を投げた。Mは中村より先にZに水を飲ませ、ぶちっ！と音がした頸椎が本当に切れたかどうか確かめていた。頸椎は切れていなかった。

見つめていると、口が微かに動き手足が動き出した。続けて、無言だが上体を起こした。ただ、薄くあいた眼は尋常の光を失い虚しく地面を見まわすだけで、決してこちらを見ない。数分後、現実の死を体験した恐怖なのか、こんどは眼が異様なまでに大きく見開られ、全身をがたがたと震わせ二度痰を吐いた。空いた窪地を見つけ躰をごろりと転がせ、必死に逃げようとする。そのまま軟らかい土の上を転がり森の窪地に隠れ、Zはいなくなつた。

Zは死んでいなかった。無言で窪地へ転がっていく様を見て、正直、二つ、ほっ

とした。これでどうやら問題は解決したと、加えて、殺さなかったと……

木杭や鉄パイプを窪地に埋め込む作業を終えた後、あらためてMに訊いてみた。

「おたく、なんで、冷静なままだ」

「革命的暴力って凄いですね。問題を、いっぺんで解決させました。」

よく分らない回答だ。ただ、何事も白黒つけたがるMがすっきりとするのは分かる。

「あ、あれ？ あれは、窮鼠猫を噛むの一撃だ。倒れたZが上体を起こしたあとにもう一度小刀を構えてきたら、俺は何もできなかったかもしれない」

「そうになったら、私が殺すつもりでした。中村さん、私自身は初対面の『白十字』での第一印象どおり、根っこが対人恐怖症のままでも何も変わっていません。でも、ひとは自分の属している場、背後の力次第で何かが変われる単純な生き物です。こんどのある種の『正義』と『組織の問題』、私は過去の私でなくK派の私という機械に、いま、なれたんです。革命的暴力に向き合うのはK派の一機械としての責務、申し訳なくはありません」

世間には、決められた物事をいとも簡単に実行する人間がいる。眼の前にいるMもその一人かもしれない。ただ、そのことにどう反応してよいか分からない。実行力があつて立派だというか、機械になれてよかつたなというか、Mはどんな『正義』を得たのだろうか？

「じゃあ、おたくの根本は大丈夫か？ もし、Zがあのまま死んでいたら穢れが澱のように残るんじゃないか、善でも悪でもひとを殺すことは原罪で罪深い」

「中村さんも確信しているはずですが、革命運動家に罪の意識はありません、悪いことに加担したとも思っています。今回の行為は、自動車の暴走運転で無垢な人間を撥ねて殺すこととは違います。お互い承知の上での一結果です。もしあのまま死んでいたら、Zはある種の『正義』の前で運が悪かつたんです。中村さんは運を持ってらんです。むしろ、私たちがZに追い詰められて泣き寝入りの形で活動の場を閉じ、K派の運動から逃亡してしまつたら、その方が罪深い。今日はいい体験をしました、私は革命的暴力を信じます」

——暑い日に、ミミズは土のなかから地面に這いだしってくる。きつと、土のなかも暑いからだろう。這いだしでも、一度出てしまつたら、すぐ干からびて死んでしまうのに……。

党派の活動家も同じだ。日々、諸悪の根源、エセ国家や資本家とその番頭どもという強大な敵に向かって戦う。けれど、戦いの仕方であらうだと揉める。活動家の背後にはその戦いを支持し参加する数千万の人々がいると夢想し、揉める、揉め続ける。で、そこから、数千万との対話ではなく、それならてっとりばやく党派の活動家同士で先ずは争い抜き、勝った者が数千万人のリーダーになればよいという悪夢に走る。その政治的な『正義』の下で矮小な暴力が生まれるのも必然だ――

――始末が悪いのは、この争いを勝ち抜く者が正義の覇者というわけではないことだ。おおかた、勝っていくのは謀略や暴力に長けた悪人党で、地道に対話や抗議・説得を試みる善人党は死んでゆく。大きな敵と戦うことを恐れ、忘れ、崇高な理念もわきに置きっぱなしにし、数千万といわず先ず数千・数万の活動家を得ることに執着する。そんな悪人党は土のなかなかなか這いださない。この世に、人々の期待に応えるミミズは現れず、這い出すミミズは干からびてどんどん死んでゆく――

俺も所詮、這いでるミミズだ……。俺はいま、この持ち場から退却しない。政治的な『正義』のため、鳩のココロと蛇のチエで争い抜く。退却したら、K派と自分の存在が無意味なる、K派は、俺にとって『ひとびとの幸福のために存在し、有益につくす』聖なる善人党の国家なのだ。『正義』ためにはどんなに悪事を働いても、すべての行為が許される。

## 6

午後六時二十五分、東京メトロ丸ノ内線とつながるターミナルの荻窪駅でMたちは降りた。Mは座席に座ったままで降りる気配はまるでなかったのに、ドアが締まる直前を計って降りて行った。着ていた薄い草色のジャケットの内ポケットに、金色の光を放つ文鎮がちらりと見えた気がした。残った人生でもう二度と遭遇するとは思えない、同じ時間同じ場所で出会うかもしれない……。そのまま見送った。

中村は、三十年前も現在も同じ場所に住まいのある二つ隣の中野駅で降りた。六時半、まだ暮れていない駅前には蟻のように活潑に動きまわる繁殖力に満ちた人々

の暮らしが見え、ある種の幸福感が満ちている。

中野サンモールの看板がかかったアーケード街に足を踏み入れると、様々な声が一気に耳に飛び込んできた。今日も無事に巣に戻る感覚で、にぎわっている街に躰が癒される自分がある。雑貨、衣料品、八百屋、ラーメン・トンカツ・喫茶・居酒屋、書店、ゲームセンターと通路の両側に小さな店が続き、主婦、親子連れ、カップル、学生や勤め人のグループと大勢の人間があちらの店こちらの店と出入りしている。ひとの波がにぎやかに行き来する光景が今日はいっそう新鮮に見え、中村は人混みの通路をゆっくりと歩く。

後日譚としては、

——国鉄闘争は、七五年十一月の八日間にわたる『スト権奪還スト』で戦後労働史の天王山を迎えるが、敵の資本・国家にとっても『条件付き分離付与』という予定調和の妥協は許されない総力戦に持ち込まれ、労働側にその内部からの妨害も生じ結果的に敗北。国鉄解体とJR化の道へ。戦後の戦う階級闘争路線の総評は、八九年、労使間交渉以前に敵の門前に下る政策協調路線の連合へと完全に飲み込まれた。

——K派は、七七年には社会党内最有力派の立場を手に入れ総評にも影響力を持つにいたるが、決定的には「巨人、大鵬、卵焼き」の社会党支持の選挙民がソ連型社会主義を受け入れるはずもなく、資本の側がてこ入れする党内・労組内右派の総反抗にあい数年間で一気に支持を失い八六年に分解・解体へ。実際には、ほぼ大企業の正社員と公務員を代表するにすぎない労働組合やこれを支持基盤とする政党が、口当たりの良い『平和と民主主義』のスローガンで国民全体を代表してきたかのような虚構は、八〇年代で一度破産する。

——中村は、三多摩地域で自治体のK派構成員を一年で九十名から百八十名にし、全国労組青年部でも指導部の足場を得た。が、自立的活動家が党派にとらわれず横断的に存在すべきという東経大社研で得た経験の特異性とそのグループ作りが批判され、七八年、二十六歳のときにK派内で失脚、除名された。

「私、三週前からスターリン同志の『レーニン主義の諸問題』を精読しています。スターリン全集ダイジェスト版の九百ページだから、編著者が言うように革命運動者にとっての日々の様々な疑問が、スターリン同志の言葉で全て解決されます。やっ

と、革命運動の神様が見つかりました。Zへの事件の後、拜むに足る革命教本をずっと探していたんです」

大きな顎が軽やかに動き、すっきりした口調でMが言った。

「K派のS事務局長が、『スターリンには功罪があるが、その文章や講演記録は簡明でかつ非常に論理的だ。我々が学ぶべき点は実に多い』と言った二十年前の古い教材か」

と、中村が応えると。

Mはいつもはいくらか猫背の背筋をしっかりと伸ばし歯を見せて笑い、憑かれたように大きな声で、あの文鎮の刻印のついたページの『レーニン主義の諸問題』を読み上げる。

「『①一九〇七〜一九一二年の時期には、党は退却戦術に移らねばならなかった。闘争形態は、国会ボイコットにかわって国会での演説・活動、政治ゼネストに代わって部分的な経済スト。組織形態は、革命的大衆組織から文化啓蒙組織、協同組合、保険組織等の合法組織に置き換えた。戦略は変わらなくても戦術は何回かわってもよい。(但し) ②党は自然成長的な運動のあとをのろのろとついていけない。党は労働者階級よりも先のことを見通さなければならぬ。組織された党は、権力の創造、思想の権威、党の上級機関に対する下級機関の服従を意味するものである』、どんな法律によってもどんな規則によっても束縛されない、直接暴力で自ら保持する無制限の絶対的権力が、我々の党です」

「当り前で単純なことだな。だけど、全能者でもない指導部にだったら服従は苦しいな。革命を目指していても、俺達はもしかしたら良質な政治形態の戦後民主主義の世代だぜ」

「でも、プロレタリア独裁を認めて『正義』のために戦うって、所詮、そういうことです。私は、もっともっと戦う機械になりたいんです、もっともっと戦う機械になりたいんです。中村さんも……。ならなければいけない」

三十年前、Zとの事件から一か月後に、Mと交わした会話だ。

中野ブロードウェイを過ぎて、アーケードが途切れる十字路に差し掛かった。そこからは、季節と時間を変え様々に狭められた高い空が見える。眼をあげると、今日の空の色は夕映えの橙色だった。路上の喧騒が消える。

あらためてMを想った。もし、Mが一九七四年という時代にいなくて、あんな事件にも出会わなかったら、たとえ偽善な繁栄でも繁殖力に満ちたこの暮らしの光景のなかにいたのだろうか……。事件から一年後、MがK派ではない中村が殺しそこなったZが属したKA派に自分の意志で入り直し、△△派やKA派内の内ゲバに明け暮れる住所不定無職の党派構成員として過ごしたこの三十年はなかっただろうか……。

もう一度空を見上げると、狭められた空には一条のうすら赤い雲が何かの合図のように停止していた。路地の狭間から吹き抜ける風に冷たい湿っぽさがあり、身体がぞくぞくとした。

参考文献

スターリン『レーニン主義の諸問題』一九五三年 大月書店